愛の弾丸
社会主義学生同盟同志社支部発行、
1964、4、16

民族問題とマルクス主義

《日韓闘争に於ける国際主義》

文責　竹野　巌

《Ⅰ》はじめに

革命の墨汁スターリンによって教条化された「マルクス主義」を、生命あふれるもの、とする作業は、「新古典派マルクス主義」として、展開可能な思考形式を持たねばならない。

それは、個別部門に於て、科学としてのマルクス主義を創造するものとしての意味を同時に与えられ、シュムペーターと化した小羊の悪魔粉々とした残骸をすて去せり、新しい強靭な理論を育て上げる試みである。

試みは、唯、現実と密着した思考によって、のみ、結末知の森林の中に一歩突き進むことが出来る。

日韓会談阻止闘争は、日本の戦后史初めて、民族問題を階級闘争の基軸にすえつつあるという、新しく試生みられるべき現実である。

民族問題、この言葉は、トロツキー主義者、ローザ主義者にとってタブーであり、スターリン主義者の主要な特許であったという奇妙さを持ってさえいる。それ故、なお一層「新古典派マルクス主義」は、ローザ社、トロツキー、レーニン、いずれかを貧りて安寧を売りするという思考から、水をあけざるを得ない。それは「トロツキズムの破産、あるいわ、スターリニズムの消滅そのものによるのではなくて、この抽象方法の絶対化そのものの原理的破産を意味する。」

一九五八年以降、安定から激動へ、と全く新しい局面を迎えた資本主義は、民族問題という概念に新しいゲシタルトを付加している。EECの登場は、民族問題とインターナショナリズムを大きな試練にかけた。「先進諸国に於ける資本は、民族国家のワクを乗り越え、自由貿易の代りに独占」（レーニン）を一般的傾向とするだけでなく、EECは、資本、商品、労働力、技術、開放者の自由化により、民族問題―民主主義と進歩革命の問題に新しい装いをこらしている。

すなわち、労働者間の対立は、民族国家間の対立というよりは、むしろ、EEC全体として新しく編成されつつある。スペイン、イタリアの過剰労働力のドイツへの移動は、「ヌルジョアジーの政策により、激しい分裂（賃金、民主主義）を生み出している。この分裂―敵対は、「民族自決」では、止揚出来切れない。EEC全体の中央集権的な労働者階級の指導―インターナショナリズム―こそが、新しく発生した民族問題への解答であらねばならない。

ヨーロッパのトリアッチ構改路線は、その一国的革命思想によって、疑いもなく生きたシカバネとなってしまった。彼らは、民族国家のカベの内でのみものを考える。自国のプロレタリアートの利害から、全体の利害を奪く。それ故、EECの諸国のプロレタリアートの利害は、分裂し、敵対化し、インターナショナルイズムは、排外主義に置き代えられる。

彼らは、下層労働者の犠牲の上に立つ、上層労働者の貧困した部分に依拠するが故に、国家資本主義ブルジョアジーと統一し、そうすることにより、他国プロレタリアートと敵対する事により、自ら社会排外主義に転落させているのである。

インターナショナリズムは、革命的プロレタリアートと民に立脚することによって、はじめて、自らのものとする事が出来るのである。

マルクス主義とは、革命的プロレタリアートに立脚した思想であり、それ故に、不断にプロレタリアートの分裂を止揚し、一切の階級の根絶を自らの使命とする共闘闘争の意識＝インターナショナリズムを顕現することが出来る。

以上は、一九五八年以降、資本主義の局面に現われた新しい現象の一つ―EECと民族問題―である。もはや、明らかにした様に、トリアッチ路線が、新しい民族問題に、全く対応出来ないことは、民族問題をマルクス主義の革命観から把握しなければならないことを示している。

《Ⅱ》正史史的系譜

帝国主義時代初期に於ける、レーニンの民族問題（帝国主義と民族、植民地問題）とトロツキー、ローザ（資本蓄積）のそれとの相違は、永続革命の思想をめぐる論争でもあった。

一八四七年、エンゲルス、マルクスによって提起された、永続革命は、一七八九年革命の継承にもかかわらず、資本主義そのものの生命力によって否定された一八五〇年、永続革命の立場が、マルクスによって行われた。一八六九年、アイルランド（民族）問題、普仏戦争（パリ・コミューン）は、マルクスが、永続革命を実践に止揚した事を示した。

このマルクスの立場が、ロシアマルクス主義としてレーニンに結実した。

だが、他方、ローザ、トロツキーの思想は、一八四七―五〇年のマルクスの立場―永続革命―にとどまっていた。ローザとトロツキーは、レーニンの民族主義に対して理論主義を自己の心情にとどめ、

ローザは、彼女の資本蓄積論に見られる、資本主義の自動崩壊論を永続革命のイデオロギーの論拠としつつ、同時に、スパルタクス団（プチブル急進主義とルンプロ）をその部隊とすることにより、民族問題についての帝国主義的経済主義に陥らざるを得なかった。ヨーロッパの連続的革命を頭にえがく事により、「資本主義のもとでは、自決は、実現不能だ」との結論に達した。ローザの思想は、マルクスに自ら立脚しながらも、スパルタクスの体験の故に、永続革命、至着主義、自然発生性へのハケキ、そして、民族問題に於けるプルードン主義に陥ってしまったのである。

ボルシェヴィキの誰れよりもヨーロッパ思想に深くて帝期間のヨーロッパ滞在中、ドイツ社民の急進派よりも中心的グループとの交渉の深かったトロツキーは、レーニンの称に、ロシアの現実（民族的特質性）に対する深い認識を得る事が出来ず、民族問題の口塞により分断されたプロレタリアートの接近―結合の政策（インターナショナリズム）よりは、むしろ、資本主義の不可と的連続的革命により、民族問題への具体的政策を放棄してしまった。一九一五年の『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』のレーニンとの論争は、その端的な表現でもあった。

資本が不断に民族国家のワクを越える帝国主義の時代は、民族国家の上に、労働者、特に労働貴族に、排外主義を生み出した。ドイツ社民の中央派と右派は、闘争的プロレタリアートを犠牲にして、議会主義を深めていたが、ドイツ資本主義が、市場問題で行きづまり、闘争的労働者の犠牲の上に戦争へとふみ出すや右派や、排外主義へと転落した。

オーストリア・インターナショナル、カウツキー主義の崩壊は、労働貴族に立脚することにより、同時に、他民族国家の革命的プロレタリアートと敵対した結果のいまわしい出来事であった。

レーニンが、民族問題について、現実主義的思想を持ち得た理由は、一八五〇年以降、永続革命思想を止揚したマルクスのアイルランド問題（民族問題）を、ロシアにおける複雑な民族問題の経済の上に提起した為なるである。更に、帝国主義の再分割の時代が、部分的な一国家内の問題から一般的な国際的問題に、すなわち、帝国主義の矛盾から、植民地の被抑圧民族を解放するという世界的問題に、民族問題を引き上げることを、『帝国主義論』で明らかにしえたからである。

『資本蓄積論』と、漸進的インテリゲンチュア・プチブルに依拠する事により「帝国主義的経済主義」に陥った、ローザ。上昇ハダラクした労働者に依拠することにより排外主義に陥った、カウツキーにくらべ、レーニンは、目的意識的に組織され規律をもった現実を世界的革命の中核とする思想に立った。帝国主義段階初期の、民族問題の論争は、諸派が、プロレタリアートのとの関係に、世界的な自ら基盤を求めるかによって、決定された。（あたかも、一八六一年アイルランド民族問題に於て、プルードン派が、プチブル急進派に基盤を求めたのに対して、マルクスが、革命的労働者と農民に自ら基盤を見い出した様に。）

一九二三年以降のスターリンとトロツキーの論争に於ける民族問題にしても、両者が、立脚した基盤に規定されている。革命につかれはてた、労働者と農民の結合による社会主義建設を防げさせる事ならものごとを考え、スターリンは、諸国プロレタリアートのエネルギーをソヴェート防衛主義と民族主義に転嫁させる事により、ブルジョア排外主義・大国主義にから入ってしまったのである。

逆に、トロツキーは、ソヴェート内在契機対派に立脚する事により、反対派的思想に陥り、その事により、インターナショナルな政策を放棄（言葉としてのインターナショナルは、言ったが）したのである。それは同時に、一国社会主義建設論に対する永続革命論の『政治的敗退』の過程でもあった。

レーニン死后、民族問題についての創造的思想は、誰れにまっても生み出されないまま、現状を向えている。

Ⅲ 民族問題の新しい傾向

一九五〇年を転期とする資本主義世界の構造的変化―新しい再分割と敵対―による、労働者階級、人民の意識の流動化は、創造的革命思想を生み出す基盤を形成しつつある。スターリン時代により殺り死滅したマルクス主義―科学の復活と創造の時代である。

民族問題は、現代資本主義に於ける、民主主義と革命に於けるインターナショナリズムとしている。

「インターナショナリズムとは、一切の階級の根絶を自ら使命とするプロレタリアートの共同闘争の意識的表現である。」

現在、インターナショナリズムを根底から、変えている野田は、生産過程に於ける資本の国際的結合（国際独占体コンビナート）によっている。マルクスの時代は、民族問題は、きわめて一国的範囲の事であった。レーニンの時代は、帝国主義と植民地問題としてあらわれた。現代の民族問題は、先進資本主義国の資本の生産過程に於ける国際的結合と、それによる、世界再分割としてあらわれている。

資本の生産過程に於ける国際的結合―国際独占体は、高度資本主義国の危機―革命の同時性と、後進

国際的な連帯は生み出しつつある。世界革命が同時的・連続的・永続的革命として生み出される要因が一応形成されつつある。

また変化は、戦後問題に、新しい様相をうながしている。

《イ ヨーロッパ（巨巨ごと）と、戦後問題。》

ヨーロッパに於ける、戦後自決権は、ブルジョア革命（十九世紀）時代に於けるオランダ・ベルギーの独立で終ったが、巨巨ごの場合は、戦後国家間の対立による抑圧と被抑圧という問題を含んでいる。全ヨーロッパ革命の展望に於けるインターナショナルの立場に基づいている。

巨巨ごは、南ロシアが、戦後国家のワクを突き破るという一般的傾向から、生産過程に於て、国際独占体コンビナート上を生み出し、プロレタリアート上を支配し、全ヨーロッパ化されるという、資本主義の矛盾を生み出した。

だが、プロレタリアート上の抵抗は、全ヨーロッパ化をはばむまで、戦後国家のワクにしばりつけられている。イギリス労働者は、巨巨ごに加盟という危機に於て、労働党が、ブルジョアジーに加担した事によって、非常に転落した。

イタリア社会党は、巨巨ごに結成に参加する事によって、プロレタリアート上の真の利益と敵対した。その原因は、イタリアの上層労働者と、国家資本主義的ブルジョアとの統一戦線（人民戦線）により、革命的プロレタリアート上と敵対し、そうすることにより、世界プロレタリアート上の共産主義と対立関係にあらわれたのである。

フランス社会党は、第一・第二の人民戦線革命に対して、ゴールを支持することにより、非常に転落した。それは、人民戦線からの脱落の一層化することにより、プロレタリアート上の長所を戦後国家のワク内に閉じ込めた結果である。

ドイツにしても、資本の全ヨーロッパ的結合に対して、一国革命論者―人民戦線論者―は、ヨーロッパ諸国のプロレタリアート上を戦後的敵対に陥しいれ、ファシスト的に転落する事を証明した。

それは、スターリニズム上が、革命的プロレタリアート上の利益を代表せず、上層プロレタリアート上と国家資本的ブルジョアジーの利益を代表している事の表現でもある。

現代資本主義の新しい局面―巨巨ごの場合―に於ける、インターナショナルとは何か？

それは、「戦後的平和主義からの解放」であり、「一国の革命を世界的革命に従属させるものだけ」ではなく、その為には、自国帝国主義打倒を新しい形式としてもつながら（例えば、ドイツプロレタリアート上は、ひとがわた、差別されたスペイン、イタリアプロレタリアート上の立場に立ち）同時に、巨巨ごヨーロッパ革命を、世界的革命の課題として、

資本の中央集権化に対し、プロレタリアート上の中央集権主義（ヨーロッパ革命と統一指導）のみが、唯一、勝利を保障するだろう。

革命的プロレタリアート上に立脚した思想のみが、唯一、新しいヨーロッパに於ける戦後問題をインターナショナリズム（マルクス主義）によって解決しうるであろう。

《ロ キプロスの内乱と戦後問題》

キプロスに於ける戦後問題は、抑圧民族に対する自決一般論とは、ルーニンのテーゼでは、何も語る事は出来ない事を示した。

キプロス島は、スエズ動乱当時、地中海の軍事基地として、イギリスに支配された。少数派民族トルコ人に政治的優位を与え、多数派ギリシヤ人の権利を犠牲する事により、トルコとギリシヤを対立させ、その対立の上にイギリスは、支配を確立してきた。

だが、現在、かかる支配は、国際的市場再分割と軍事的力関係の変化により、変革の動揺をきたしている。

キプロス島は、数々の分裂者とインフレーションとスエズ動乱で、ダブがゆるんでしまった。

そこで、ギリシヤ系ロのブルジョアジー（ト）の裏には、ファシスト、いるのだが、キプロス島ギリシヤ人内、極右分子（エオカ）と結合して、エノーシス運動（キプロス島のギリシヤ人の併合）を始動し、侵略しようとしている。

キプロス島内住民（労組）は、ソ連の援助に傾いている。かかる、右と左の均衡にマリオネット不安定がポナパルテいるのである。

他方、キプロス島内、トルコ系は、どうか。彼らはイギリスに後押しされている。イギリスは、戦略的にキプロスが、決定的に重要なのだ。トルコ系住民は、「有利な」として、有利の為に内戦を挑んでいる。

このキプロスと戦後問題は、㋑軍事的市場再分割㋺軍事的、米英対・仏という対立関係に於て、㋩ソ連が、介入しているという意味に於て、従来の民族自決では、一切認め得ないだろう。

民族自決の一つの可能性を考えられる。

㋑ エノーシス運動は、解放をもたらすのか。否である。この運動は、ギリシヤ系ロのブルジョアジーとキプロス内ギリシヤ系ブルジョアジーの利益を代表した運動である。

㋺ ソ連の援助はどうか。この政策は、米英・仏・ギリシヤの激しい侵略という事態には、やはり石の水である。むしろ、逆に、プロレタリアート上と緊張を強せるだろう。

㋩ トルコ系住民の分割政策はどうか。これも、イギリスによる、トルコ系人のより巧みな支配強化をもたらすだけである。

では、トルコ系ギリシヤ系プロレタリアートの接近の政策とは何か。もはや、この時点では、キプロスに於けるソヴェト権力（ギリシヤ系・トルコ系労働者の結合、革命権力、民主主義）以外には、道は残されていない。キプロスの社会主義革命の上に立って、ソ連との自由な同盟（分離の自由）以外には、道はないであろう。

それは、「民族自決―独立」では、把えられない、民族問題の新しい傾向の一つである。

《Ⅳ》日韓合邦論と国際主義

民族問題についての国際主義の試練は、日韓合邦という、成立日本初の民族問題を主軸とする階級闘争に於ける、社会愛、共感愛、構改派、既成左翼が、すでに排外主義に転落しつつあるが故に、ますく国際主義とその政策―斗いの方向を具体的に明らかにしなければならない。

排外主義が、形成されるのは、客観的存在としてのプロレタリアートのあるがままの意識に規定されている。

すなわち「正当的に形成された国境によって諸民族に分裂し、とりわけ、帝国主義段階に於ては、抑圧民族と被抑圧民族に分裂し、生活上、政治上、精神上の差異・特権を付与されているプロレタリアートの分裂によっている。

ブルジョアジーは、自分が生み出したこの分裂に、支配の基礎を見い出す。だから、民族問題に対する国際主義の政策は、すべての民族プロレタリアートの接近の政策を打ち出す事である。

政策は、抽象的、形式的な原則から出発すべきでなく、具体的な諸現象から出発することからはじめられなければならない。

《A 帝国主義的侵略と他民族抑圧政策》

日韓合邦は、国際独占体間の市場再分割戦争の中で、独自の支配圏を求めつつある日本帝国主義が、アメリカとの同盟者としての地位と、韓国ブルジョアジーの支配を利用しつつ、韓国への政治経済的支配を強化せんとする帝国主義政策である。

この政策が、まずなによりも、韓国人民への搾取と抑圧の政策としてあらわれるのは、次の事情による。

① 日本商社の安価な製品の輸入による韓国民族産業の破産、破壊。これを日本独占に吸収する。（工業部門における機械、又は、休業工場は、一平均80%にのぼる。）

② 日本独占による原料、食糧の独占（合併（企業）とのテイケイ）

③ 日本への食糧輸出などを通じて（を独占する）、農業に対して低価格を強制することによって、農民を破産させる。（産業人口の67%が、農業に従事し、その67%が単純再生産も出来ない零細農業）

④ その他、港湾、鉄道、通信、金融、等を、（産業中枢部）を握り投資することによって、韓国経済を掌握する。

⑤ 安価な労働力による超価利潤。産業人口の23%にのぼる、現在の失業者に、新たな産業予備軍を加え甚しい低賃金を維持する。

⑥ 有償、賠償ら債ドルのバイ償は、一、軍事政権、軍隊、官僚のバイシュウによる立てなおし、軍隊、警察装備の強化、二、日本の民間企業に援助する。（逆もどり） 民間ユウ資ノ債ドルも、水のあわとなる。なぜなら、エン助をもらった資本家は、工場も建てず、インフレによるドル価値の上昇をまっているのだから。

⑦ 最后に、このような搾取と収奪の政策をより成功的に遂行する為（すなわち、大衆の収奪と、他の外国資本に対して）外交権、内政権のハクダツから、軍隊の武装解除に致る迄の政治的供給政策へと向わざるをえない。

このような政策をゆるすならば、成前の至難によっても明らかなように、日韓労働者の敵対、憎悪をひき起こし、その敵対―憎悪を利用した支配階級に搾取を利用されるだろう。そこで、又、日韓労働者の蔑視、他方における不信憎悪という力ク執によって、一方を帝国主義ブルジョアジーと排外主義、他方を民族主義にわち入らせるだろう。

被抑圧民族の立場に立って、抑圧民族のプロレタリアートは、自分の利害を決定しなければならない。被抑圧民族のプロレタリアートの立場に立つことによってのみ、両支配階級が、ふりまく民族的偏見（支配の武器）をとりのぞくことが出来る。

従って、国際主義にとっての民族問題とは、すべての民族、すべての国のプロレタリアートと人民の「接近の為の政策」を打ち出すこと。「このような接近だけが、資本主義に対する勝利を保障する」

韓国農民の斗いは、無条件で支援しなければならない。

《B 李ライン、テッパイ反対!!》

韓国漁業人口の80%は、動力船を持たぬ零細漁民であり、月収は、四九〇〇円（日本の零細漁民は、五万円、内、営業費金二五%）にすぎない。自給自足の出来ない漁船、漁具の価格騰貴、船主の収奪、漁業不振の為、漁民の貧乏化は、急速に進行している。彼らにとって、李ライン＝平和ラインの死守は、至上命令である。

一5 釜口の大船主にとっては《一ドルでも余計に日本から漁業援助資金を獲得し、遠洋漁業に従事し、これまでに投下した資本の回収が出来れば、李ラインは問題ではない》のである。

一方、日本の漁業は、どう又、李ライン問題については、二つの立場がある。一つは、太洋漁業、日ろ漁業等、大独占と、その下に系列化されている中小漁業である。太洋、日ろ漁業は、遠洋漁業を行うと同時に下うけから、四割をしぼり取っている。太洋、日ろ漁業は、下うけ中小漁業（系列化）に、能力を上げさせようとしている。李ラインテッパイを大声で叫び池田をつき上げている張本人は、漁業独占である。

しかし、漁業独占の下うけの漁民も、即時的に李ラインテッパイを求めている。李ラインテッパイによりもっと魚がとれ、給料が上がると思っているのだ。

他の一つは、対島の漁民である。彼らは、李ラインテッパイに反対である。李ラインがある事により、大独占とその下うけにあらされずに魚が、出来るのだ。彼らは、命をかけて、李ラインの中へ入っていくことによって生命を守っている。彼らにとっては、韓国資本家と同様、李ラインテッパイは、〝死〟を意味する。

☆李ラインテッパイを支持する部分は ① 日本の漁業大独占、とその下うけ、及び労働者（彼らは、高搾取により困るということとともに、魚がとれ、金がもうかるから支持と思っている） ②韓国の大船主、彼らは、日本からの漁業エンジョ金が目あてであって、李ラインは、どうでもよい。

☆李ラインテッパイ反対の部分 ① 日本の対島の漁民と ②韓国の零細漁民である。

だから、我々の国際主義の政策（プロレタリアート接近の政策）は次の様なものである。

まず、李ラインテッパイは、日韓漁業ボスの利害に立つことを意味する。社会党、民社、自民党、そして日共も排外主義に転落した。

我々は、李ラインテッパイに反対しなければならない。このことは、何よりも、被抑圧民族のプロレタリアート人民の立場から抑圧民族の立場を決めるという、両国人民の接近の政策である。韓国の貧しい漁民は、二重の搾取をうけている。日本の漁業独占と、韓国の木ス に。

日韓の漁業資民を最后的に解放する為には、日韓の社会主義革命以外には、道はない。このことは疑いもなく明らかである。そして又、李ラインが真にテッパイされるには、社会主義革命の后に、真に解決されるであろう、だからといって、李ラインが問題にフ

「帝国主義国（日本帝国主義とヨメ!!）が、長年にわたって、植民地民族や弱小民族（韓国人てよめ!!）を抑圧したことは、被抑圧諸国の勤労大衆の間に、抑圧民族一般に対する（プロレタリアートもふくめて）憎悪だけでなく、不信の種をまいたのである。」（三五年）

「これらの偏見の死滅は、きわめてゆっくりと進まざるをえない。ここからして、各国の意識的な、排外主義的なプロレタリアートは、きわめて長い間抑圧されてきた諸国及び、諸民族の民族感情の遺物に対して、特に用心深く、特に注意して、接することが、ひじょうとされ、又、同じ様に、さきにあげた不信と偏見をなるべくはやくなくすには、ある程度の譲歩が必要とされて来る。」（レーニン）

李ラインを真にテッパイする為には、現在、李ラインを守らねばならない。これのことが、両国漁業の接近の政策の一つである。（もっとも、重要な接近政策は、日韓会談を実力斗争で粉砕し、韓国革命を支援することである。）

ところで、こう言う諸君が、いるなろう。「日本の貧しい漁民も困っているではないか」と。この人は、『心のやさしい排外主義者』である。

日本の貧しい漁民には、二種類ある。一つは、大洋漁業、日ろ漁業等、大独占に系列化された中小漁業の漁業である。二つは、対島の家内的零細漁民である。彼らは、李ラインがあるからこそ生活しえている。李ラインギリギリ、あるいはライン内で漁をしている。大独占が、ラインに入ることをおそれているためである。彼らは、李ラインテッパイ反対である。

問題は、大独占の系列化された漁民である。彼らは、李ラインテッパイにより、給料が上るからラインテッパイを望んでいる。だが、彼らは、より搾取、労働強化が、行われることを知らない。李ラインテッパイを望んでいる、だが、搾取強化が行われるのだ。

ゆえに、以上の複雑な条件の中から、我々は、国際主義（労働者間の不断の接近）の政策をもって日韓斗争を敵民的に斗う事 ② 李ラインテッパイに反対することである。

それは、日韓会談を、我々の実力で阻止することであり、その斗いの一つの要素としての李ラインテッパイ反対である。

これは、先にも述べた様に、被抑圧民族のプロレタリアートへの譲歩、接近の政策である。

ゆえに政策を提起しえず、一般的に社会革命を叫ぶことは、その社会革命の契機と性格を明らかにしていないことの表現であり、トロツキー、コミンテルン、毛沢東、国主義的至善主義の

一、〇南北統一問題〈

一九六〇年四月革命の日、七月『ソウル大会』、民族解放

統一連盟」は、次の様な決議をした。㈠ 南朝鮮のすべての政党、社会団体は、南北総選挙に備え、連合する土台を築け、㈡政府は、統一問題について現実に口頭した積極外交を展開し、張 勉 総理は、このため米ソを訪問し、その首脳と会談せよ、㈢在外人民代表者で保障された人間の基本的権利である、書信の自由を南北間に一日も早く実施する。 と、スローガンは、対内的で会合。であった。

このような南朝鮮の動きに対して、一九六〇年八月一二日、北朝鮮の金日成から次の様な提案がなされた。

㈠ 自主的な自由総選挙による統一が望ましい。

㈡ 南朝鮮側が、共産化を心配するなら「朝鮮民主主義共和国」と「大韓民国」の主権と制度を保有しながら過渡的措置として南北連邦制を設ける。

㈠ 連邦制を運営する機関として南北同数の代表から成る「最高民族委員会」を設置する

㈢「連邦制」も反対するならば、「全国委員会」を作って、民族至者の総合討議に当ろう。

㈣ 南北間の緊張緩和の為に双方の兵力を10万以下に減らす。

我々は、一九六〇年、学生革命当時に於ける、南北統一問題を、「情勢と革命との関連の中で評価」判断しなければならない。

学生革命という限界を、いわば脱皮するなというこの中の革命的エネルギーをいわば拡大し、発展させるということに注目すべき時期であった。その様な時期にあって、行き場をなくした学生人民が、南北統一へと、エネルギーをくっつけつつあった時、北朝鮮の金日成から提起された「統一政策」は、革命を減殺させる性格をもった。

更に、「統一政策」は、「共産化を心配するなら」等にみられる様に、民族の統一という一般的要求にまいばっし、プロレタリアートの不断の政策とはなっていない。南の社会革命を煽動する以外に道はないことをぼやけ、革命のエネルギーを麻痺させるものであった。このような、日和見的立場は、一口社会主義的思想と民族主義にねざしている。

現在の情勢にあって、「統一問題」は、国際主義的立場から、どのようにとりあつかうべきなのか。

この評価は、民族問題の新しい傾向に対する解答となければならない。すなわち、スターリニスト圏が革命におよぼす問題である。

我々は、キプロス問題に於て、フルシチョフの指導の評価を行ったが、今、日韓条約に及ぼす影響について考えて見よう。「新しい国際連帯を考える場合、一つ越えた、一原理が、発展してくるにちがいない。まず第一に、国際社会は、低開発国の経済開発を促進する[illegible]進国の努力者階級にとっても結局は、福祉をもたらすということである。」

この考え方は、先進国プロレタリアートと国際民族の敵対―支配の思想である。フルシチョフ―トリアッチ路線は、中立主義の幻想ベールをかぶりながら、生産力説により、ブルジョアジーのイデオロギーに陥ってしまっている。この考え方は、中立主義の崩壊によって、反革命的政策の役割をはたさざるをえなくしている。

他方、毛沢東路線は、どうか。「プロレタリア国際主義の原則は、その国の人民大衆の基本的な利益から出発すると同時に、全世界のすべての民族の人民大衆の利益から出発する。」（「国際主義と民族主義」）と、混乱を示している。自国プロレタリアートの利益から出発する、と排外主義の立場に陥り、同時に、一般的に、国際的利益を言っている。このことは矛盾である。一国社会主義革命路線の陥らざるをえないふくろ小路である。

このような、考え方が、金日成の「南北統一政策」という、客観的には、革命のエネルギーを分散させ、プロレタリアート学生に革命をよびかけるのではなく、民族統一、一般という限界を示したのである。

我々は、現時点に於ける、「南北統一」は、ありうるはいと考える。 南朝鮮の革命闘争の上に立って、日本社会主義革命との「自由な同盟」（分離の自由）及び、北朝鮮との「自由な同盟」によって解決されるだろう。

以上、我々は、民族問題のマルクス主義に於ける位置、及び、性格をマルクス・レーニン・ローザ・トロツキー、フルシチョフ・毛沢東を、若干追う事によって見て来た。次に、資本主義の新しい局面から生れ出てきた、ヒと、キプロス・日韓問題を分析することにより、民族問題の新しい傾向について明らかにしてきた。

レーニンの民族問題という、その当時の情勢から生まれてきた民族解放闘争の政策を明らかにしたのに対して、スターリンは「レーニン主義の基礎」で、一般化し、ドグマ化することにより、生命をうばった。

そうした更服する作業は、52年以降の資本主義の激動の局面により、生まれつつある、階級闘争の性格―ヒとと民族問題、キプロス問題、日韓問題――の具体的分析からしか出発出来ない。

我々は、次に、現代資本主義の矛盾の性格を、一段明らかにする作業を通じて、民族問題を深めねばならない。資本主義は、単なる至高的市場再分割なら、政治的対立を生み出そうとしている。そこからは、ただシンプルに、一つの新しい要素が、あらゆる政治的事物をのまみこんで、発展してくるにちがいない。

国際社会は、低開発国の経済開発を促進する[illegible]進国の努力者階級にとっても結

（スターリー